

ベアナドッテゴードン高 齢 者 ケアセンター

お話：ローナ・クラーク・ニエルセン部長

報告者：松本 和憲・吉田 信子

★設立の経緯

ロスキレ市の北西に位置しているこの施設は、1940年代の反ナチのレジスタンスに関わった人々とその遺族を支援するための基金から、170万クローネ(3060万円)を出資し、ロスキレ市の公費を加えて、総額2,800万クローネ(5040万円)で、1967年に設立された施設です。

ベアナドッテとは、第二次世界大戦の終り頃、ドイツにいたデンマークとノルウェーの捕虜を救うためにバスを出した伯爵の名前で、入居者は約60人です。その内の半数は、レジスタンス運動に加わった人とその未亡人で、一部にはドイツ捕虜だった人もいます。

ほに見られ、ゆったりとした雰囲気です。居室やテラスからの美しい庭の眺めと同様に、日本の施設では考えられない光景です。

★スタッフへの愛

デイセンターとリハビリセンターの水治療室やトレーニングルームとならんである、入居者の洗濯物をクリーニングするランドリールームを見せていただきました。ここではアイロンかけもスタッフの労働を軽減させるための補助具がありました。デンマークでは、障がいや者高齢の方を抱き上げる行為も一定の体重以上は法律で禁じられているそうです。スタッフの腰痛や病気な

どの職業病に関してすごい配慮が随所に感じられました。

背丈に合わせた作業台や器具の配置など

に気をつけ、故障による休養などを防ぎ、働きやすく、長く働ける職場を目指しているとのことでした。

日本でも最近厚労省から、移乗や入浴時に利用者を抱き上げるような行為を極力避けることという通達が出されました。遅ればせながら日本でも、高齢者社会に向けて、介護に対するこれまでの発想の転換がせまられています。

★敷地内にある高齢者住宅をお訪ねして



高齢者ケアセンターと隣接して、平屋一戸建てのカラフルな高齢者住宅が56戸ならんでいました。独立法人の運営から、現在はその運営を行政責任として、市が行っています。私たちが訪ねたのはリュウケさんのお宅です。亡くなったリュウケさんの夫はレジスタンス運動に参加された方ということでした。

お宅は3LDKの間取りでテラスもついています。もちろんキッチンもありますが、食事は配食サービスを利用されているよ



うです。その他にも必要な分だけ、必要な手助けにヘルパーが入るそうです。自治会があり、住宅に入居していらっしゃる方々の集まりもあるようで、お一人暮らしも寂しくなく、なかなかお忙しそうです。

昔の思い出写真とともに、お子さんやたくさんのお孫さんのかわいらしい写真が飾られていました。それぞれが独立して暮らし、家族は訪ねあって交流しあうというのがデンマークスタイルのようです。

日本では歳をとると介護のために異世代家族が互いに気を遣いながら望まぬ同居をするという話がよく聞かれます。住宅事情もあると思いますが、日本の家族制度や家族感も影響しているのでしょうか。歳を重ねてどう暮らしをしたいか、そのためにはどのような準備をすればいいかしっかり考えて、家族と話し合いたいと思いました。

★つぶやき(感想として)

施設内に植えてあるりんごについては最終どうするのかお聞きしたら、「食べたい人がいれば自由に食べます」とのこと。

自然の中で、個人が尊厳を持ち活力を発揮できるような集合住宅、お世話になる歳がきたら、一度でいいので住んでみたい場所。

第二の人生といえば夢だけで終わりそうですが、ベアナドッテゴードンは夢を叶

えてくれる場所。ふと部屋の大きさに感動しました

モモとサクラのここにご会話 「ベアナドッテゴードン」

も も：ピラミッドみたいな明り取りの天井の広々としたオープンスペースがあって、すごく良い雰囲気だったね。オープンスペースを囲むようにお部屋があって開放的な感じだった。

さくら：かわいい小鳥が飼われていて楽しい感じもしたよ。一つ一つのお部屋も住んでいる人のお気に入りの物がたくさんあって、おうちのようだったよ。

も も：そうだね。自分のお気に入りのものは大切だよ。それから、広いお庭でのティータイムはピクニックに来たようで最高だったよ。アップルパイ、おいしかった！

さくら：お庭にはお年寄り用のアスレティックがあったけど、私が遊んでもとても楽しかったよ。子供とお年寄りの両方が使えるアスレティックがあるといいね。

